

メンズリブ研究会

メンズリブ研究会は、平成3年に大阪で立ち上げられ、従来の「男らしさ」を批判的に検討し、「自分らしく」生きることを目的とする、日本ではじめての男性解放運動を続けてきました。

活動の拠点として、平成7年、大阪市中央区にメンズセンターが設立されました。

男が等身大の自分と向かい合い「男らしくあらねばならない」という呪縛から自分を解き放して、自分がありたい自分を探す場、男たちの語らいの場として、「男たちの井戸端会議」を開催したり、男たちの全国会議、メンズフェスティバルも昨年で6回目になりました。

Opinion 2

メンズリブ研究会立ち上げ当時のメンバーで、メンズセンター運営委員長の中村彰さんに、「男らしさ」にとらわれることからの解放とはどのようなものかを中心に聞きました。

見えないバリアは どこからきたのか

メンズセンター運営委員長 中村 彰さん

たがいの男たちは小さいころ、転んで泣いていると通りかかった大人に「男の子なんだから泣くんじゃない」と言われた経験をもっています。すると、男の子は「男は泣いてはいけないんだ」と学びます。また、折りにふれて喜怒哀楽というものに対しても、表情いっぱい訴えるのではなくて、悲しくても悲しくない、嬉しくても嬉しくないというポーズをとりなさいというメッセージが送られてくるのです。

仕事の世界でも、しんどくてもしんどくない顔をしろとか、過労死寸前までいってしまうほど体調が悪くてもがむしゃらに仕事をする、そういうのが男なんだという学びをしています。すると、自分の感情や気持ちをやまく表現できない人間になってしまうのです。男たちがつくっていった男社会である仕事社会というのは、本当は大切な感情や気持ちを排除しているのです。

「男の会話」

仕事の会議では、どう思ったとかいうことよりも要領よくポイントを押さえて説明することが求められます。そのような形で提示することには慣れていても、



なかむら●あきら



今回紹介した中村彰さんを含め、メンズセンターに集まった男性たちが、ふとしたきっかけから、自分の暮らし方や生き方を再考して語っている。

『「男らしさ」から「自分らしさ」へ』
かもがわ出版 1996年 550円



ライフスタイルの多様化や価値観の変化、昨今の厳しい経済状況によって、企業、地域、家庭、夫婦・親子関係に生じている「摩擦」。新聞記者である著者の取材とデータ分析により、今と未来への展望を描く。

『男女摩擦』 鹿嶋 敬
岩波書店 2000年 1,800円



男たちのこれまでの仕事一辺倒の生き方からは想像もできないことが起こり始めている。仕事を失い、家庭を失って初めて男たちは事態の深刻さを知ることになる。喪失体験を抱えた男たちは他人の話聞くことによって自分のことを整理し語り始めた。

『男たちの世紀末読本』 金子雅臣
株式会社パンドラ 1999年 1,700円

メンズリブ研究会の開催した「男たちの井戸端会議」で、こんなことがありました。サラリーマン風の人たちが来たのですが、その時限りで来なくなってしまう人もいます。その人たちにあって、メンズリブ活動をしている男たちはきつと特殊な男たちに見えたのでしょうか。私たちが延々と自分のことを喋っているのにととうしびれを切らして、

この活動に10年間取り組んでいて、相談の内容も利用者の人数もほぼ一定で、意識もそんなに変わっていないのですが、毎回地域を変えて行うメンズフェスティバル（男たちの全国会議）には全国から男たちが集まってきていて、少しずつ男たちの動きが各地に広がってきています。

の解決にはなかなか至らない根深い問題です。仕事のシフトが穏やかになっていけば男たちに余裕もでき、家庭の中の問題も改善されていく余地ができる気がします。残業で使っていた時間を家庭で家族とふれあう時間に回したり、休日に職場とは違うメンバーとのふれあいを経験

して人間性を磨くことになれば、仕事にもプラスに還元されていくこととなります。ですから、労働環境をどう変えていけるかが問われ、さらに社会全体の枠組みを変えるところまでいかなないと、男たちの本当の意味での解放は実現できないと思います。

力を抜いて生きようよ

●中村さんの話からは、男性が男らしさということに捕らわれて、男性自身の生き方を不自由なものにしているということがわかりました。また、そのことに気づいた男性のありのままの自分を語る活動が、広がりを見せていることもわかりました。

そのうちの一人が「いつになったら、本題に入るのですか」と言ったのです。その人にとって、井戸端会議でのお喋りは本題ではなかったのです。結局、情報や知識を求めていたのかもしれないね。

メンズリブの活動が、いろいろな所で共感をよんでいるからだと思います。男性問題は仕事や職場と深くかかわっていて、労働環境を改善しない限り男性の解放はありえないと思いますが、一足飛び

人生は笑われてこそ一人前

「江戸時代にタイムスリップできる。古典落語が好きなんです」と語る白鳥さんは、ラジオから流れる落語を聞いて育ちました。高校卒業後、すし職人を目指し東京に修業にでていた間も、寝る前に必ず落語を聞いていました。

静岡に戻り、さらに12年の休業後『鮎 富久』を開店して23年になります。落語の題にもなっている『富久』という店の名前から、自然に落語好きの客が集まるようになり、自分たちでも落語をやって楽しもうと『与多朗の会』を結成したのは10年前。

20代から50代までの様々な職種が集まり、年に二回、店の二階で定例会『富久寄席』を開いています。定例会の一カ月前になると週一回の稽古が始まります。妻のよし子さんも「着付けを頼まれたり、いろんな人との出会いがある」と一緒に楽しんでいきます。

「落語は男社会を題材にしたものが多く、登場人

約三百種類のハーブを生産・出荷している鈴木隆博さん。

「うちは農家だけ、土・日・祝日が休みになります」鈴木さんは、農家としては全国でも珍しい株式会社スタイルで農業経営をしています。会社では5人の社員と25人のパート従業員が働いています。

異業種交流を目的とした若手経営者が集う浜松経済クラブに参加したのがきっかけで、5年前に、「あいホール（浜松市青年女性センター）」を運営する浜松青年女性協会の役員に推薦されました。男女共同参画社会を目指す協会が現在、企画・事業グループの部長として主に学習講座を担当しています。

「従来の講座形式ではマンネリ化していて参加者も少ない。そこで、最初は出張講座で、小学校に入学する男の子がおばあちゃんやランドセルの色をめぐって討論するといった、身近なジェンダー問題を取り上げた寸劇を考えてい

人生は仕事だけじゃない

趣味の世界を広げたり、同じ目的に向かって仲間と活動・情報発信している人たちが、私達のすぐ身近にもいます。そんな仲間との出会いや交流、活動から見えてきたものは何なのか。白鳥正己さん、鈴木隆博さんの2人に話を聞きました。

物も男性が多いんですが、江戸の女性の立場を調べたり、江戸文化も学ぶようになりました。江戸の女性は、今よりずっと自由だったんですよ。封建的だと思われがちですが、生き生きと働く女性が多かった。

実は働き口もたくさんあって、店を持たなくても仕事ができる針子さんや髪結いさんは、男より稼いでいたんですよ」と、意外な発見を熱く語ります。

また、高校の家庭科の授業として、本業を生かしたすしの出前講座を頼まれることもあります。生徒たちに魚のさばき方から教えます。

たんです。ちょうどその時期に協会会長が「二〇〇一年あいホール2つのチャレンジ」として相談事業（DV等）力を入れた」の充実と男女共同参画社会をテーマとしたミュージカルの上演を打ち出し、私たちの企画と会長の意向が重なり、音楽のまち浜松の特性を生かした市民参加の創作ミュージカルの上演という内容に発展したんです。グループが考えていたことが一回り大きくなったのですが、男女共同参画社会や、やわらかな自己表現社会の実現につながるっていけばうれいすね」と、楽しそうに語ります。

「あいホールにかかわるまでは、ジェンダーという言葉すら知りませんでした。企業家や経営者の集まりといった男社会の中だけにいたので、最初は、社会的性差からくる問題に女性がいかに悩んでいるのかと驚きました。DV

す。「すし職人になりたいという女の子もいますよ。女性もどんどん活躍してほしい」と語る白鳥さんは、家事も自然にこなします。「夫婦で店をやっていますから、手が空いているほうができることをする。相手を思いやる気持ちがあれば何でも苦にならないですよ」と、当然のことばかりに言います。

「自分たちの落語の会では「人生は笑われてこそ一人前」って言っているんです。見栄や肩書きだけの人生ではなく、本音で生きていきたい。本業以外でのくらい本音で付き合える人がいるか。趣味や楽しみを見つけ、本業以外でどれだけ優れたものがあるか。それが、その人の魅力だと思います」。

では、白鳥さんにとって落語とは？の問いに「もう、生活の一部になっていきますからね」と言っていて笑います。これからも『与多朗の会』の名前どおり、仲間たちと朗らかに生き生きと一席うかがっていくことでしょう。

やセクハラの問題など、女性の立場は社会的にはまだまだ弱いということもわかりました。『男女共同参画』という堅苦しいイメージがありますが、自分の身近なところを見つめ直すことから始めればよいのではないかと考えています。参加者一人ひとりがつくりあげていくミュージカルでも、家族や地域とのかかわりの中から、一人ひとりが、悩みながらも自分らしい生き方を見つけていくことが大切なんだということを感じてもらえたらいいですね」と、熱い思いを語ります。

経営者として忙しい毎日を送っているにもかかわらず、仕事が終わってからあいホールの活動に参加する理由を、鈴木さんはこう語ります。「自分自身、今はいろいろな問題に気付いたという段階だと思います。仕事に追われているときは参加できる時間も限られてきます。でも、せっかくな仕事以外に性別や年齢を超えた人と人とのつながりを築くことができましたので、このつながりを大切にしたいと思っています。経営者としても、自らが先頭に立って男女共同参画社会を目指している姿を社員に伝えていきたいと思っています。今、企画・事業部長として三期目に入っていますが、任期が終わっても何らかの形で仲間とのつながりを保っていききたいですね」。



白鳥正己さん
静岡市



鈴木隆博さん
浜北市

人と人をつながり築いていく